



平成20年元旦午前零時の開門の様子

宗 像

遷宮で結ぶ人の輪心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

2月祭事暦

- 毎月1・15日 月次祭
- 午前10時～
高宮祭
第二宮・第三宮祭
宗像護国神社祭(1日)
- 午前11時～
総社祭
浦安舞奉奏(1日)
豊栄舞奉奏(15日)
- 3日 節分祭
- 午前11時～
於=本殿
豆打ち式 午前11時30分～
午後14時～
- 11日 建国祭
- 午前11時～

平成二十年 正月

元旦の悪天候も五日までに
約85万人が参拝

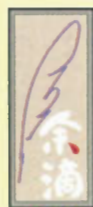
年 末より天候が崩れ、強風と雪模様に見舞われた元旦となった。昨年の世相を反映するかのよう
な、暗雲垂れ込めた平成二十年を迎えたものの、二日午後より次第に回復、三日は絶好の日和に恵まれ多くの方々に参拝頂き、初詣の願いを叶えるかのような迎春となった。

師 走の声を聞くと、当社も暫時迎春準備に取り掛かり、慌しい日々

となった。牛歩の如き迎春準備ではあったが、臨時授与所、福みくじ授与所の設置、門松や臨時交通規制の案内等各担当職員が協力、確認を行いつつ体制は整えられた。二十九日には地元田島地区の氏子総代・協力会の方々に御奉仕頂き、境内諸施設の装飾も万端遺漏



その裏では地元消防団により、安全に門が開かれました



本年は十二支では子年、六十干支では戊子(つちのえね)

の年にあたる。「子」の意を調べると「ふえる」の意で新しい生命が種子の中に萌し始める状態を表している、とある▼暦上の十二支に動物を当てるようになったのは相当地に古いようであるが、鼠といえは人間に害をなす動物としてあまり芳しくないイメージがある一方、白鼠は大黒様のお使い、瑞兆とされてきた。古事記には須佐之男命が、娘須勢理比売命に見初められた大国主命に、野原に射放った鏑矢を取って来るよう命じ、更には火を放つという試練を与える。絶体絶命の大国主命に鼠が一内はほらほら外はすすぶと逃げ道を教え、鏑矢も持って来て見事試練を乗り越える手助けをしたと記されており、鼠は福をもたらす、縁起の良い動物であるという信仰も各地に残っている▼子年が十二支の最初である事から、物事の始まりを意味することも云われるが、当社においても十二年前の平成八年には平成の御造営が本格化し、更にその前の昭和五十九年の子年には当社永年の念願であった文書編纂刊行事業に着手するなど、大きな動きを見せている▼戦後驚異的な発展を遂げた反面、民族が永年伝承してきた精神や価値観が大きく変わった。その弊害にようやく目覚めた感が無きにしも非ずであるが、今年こそ子年となるよう期待したい。(S.N)

神具・装束 結婚式場調度品

福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31
電話 福岡(092)651-9456番

本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入
電話 (075)341-3341(代)~4番
(075)343-3341番

井筒

木組の家 匠の技

総合建築業 株式会社 弘江組

〒811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567



3日の日中に参拜者はピークに達しました



開門直後から雪が降りました



1月3日の様子



1月2日の午後より天候は回復



元旦、御本殿のお屋根には雪が積もりました

なく完了、大晦日午後三時より齋行の年越し大祓式・除夜祭を以って平成十九年の諸祭儀を恙無く奉仕、新年を待つばかりとなった。

暫

しの間漆黒の浄闇に包まれた境内は静寂な時を刻んでいたが、午後十時を過ぎると小雪が舞い寒風吹き荒ぶ状況にも拘らず、今年こそとの切なる願いを込めた人々が続々と参集。同十時三十分過ぎには祈願殿前の大駐車場はもとより第二・第三駐車場も全て満車となった。神門前では例年二基の篝火が紅蓮の炎を揺らめかせていたが、今年は強風のためやむを得ず取り止めたものの、ライトアップされた御本殿、神門の淡い光が燈る中、新年を宗像大社で迎えようと寒さをものともせず待ちわびる参拝者が、長蛇の列をなした。また当大社への県道も参拝車輛で身動きの取れない状態となり大渋滞となった。

平

成二十年元日午前零時、初春の到来を告げる太鼓の轟きと共に開門、瞬間に宗像大神の御神前は参

拜者で埋め尽くされた。神前にて手を合わせひたすら祈る参拝者の姿は、干支年の最初でもある子年の如く全てが刷新され、新たな第一歩をとの願が込められているようであった。神札・御守や鑓矢、破魔

矢・福迎え等の縁起守を授与する各授与所、福みくじ授与所、地元総代・協力会の皆様方に御奉仕頂いた甘酒授与所にも、次から次へと参拝者が押し寄せ、大神の御守護を頂き一年間無事平穏で、幸多き年にと神札・御守、縁起守等を受けられていた。福みくじ授与所では福運や如何にと家族揃って、或いはグループ全員で臨まれ、景品を手に各々話はずむ姿は微笑ましい光景であった。更に本年刷新した、交通安全信仰の起源を明記したポスターや説明書に当社の御神徳を再認識された方、境内各施設の配置図を手に参拝される方の姿を多く見かけ、新たな取り組みもそれなりに効果を挙げたのではと感じられた。

新

年の祈願祭も午前零時を期して齋行され、本殿では恒例により九州旅客鉄



折願殿外壁に設置した各種パネル



第一駐車場正面に設置した境内マップ



今年も好評だった「新春福みくじ」。授与所の一部を増築し、授与もスムーズでした。



手水で冷えた手を温める参拝者(13日早朝)



今年から「子どもの鯛」も景品に加まりました



御家敷で何が当たったかを見せ合う。「福みくじ」授与所前のワンシーツ

道株式会社代表取締役社長石原進氏以下幹部社員五十名参列のもと年頭最初の祈願祭を齋行、交通安全、業務安全・繁栄、海上安全を祈念申し上げた。次いで社団法人宗像青年会議所理事長戸波真也氏他役員一同が理事長方針の下、活動の円滑な運営と会員一同の健康を祈念された。また儀式殿では家内安全、厄年祓い、商売繁盛を、祈願殿では本年一年の交通安全を願う人々の祈願祭が執り行われ、皆様方へ大神の御加護を賜るべく祝詞を奏上申し上げた。

年 初の恒例祭も元日午前七時総社地主祭、同九時歳旦祭を齋行、皇室の御安泰、国家の隆昌並びに氏子崇敬者・国民の平穏と繁栄を祈念した。二日には新年祭を、三日には元始祭を齋行、大神のご神威を普く頂かしめ給えと祈りを捧げた。

本 年は元旦の参拝者は減少したものの、天候も回復し温暖な日々が続いたことや、更には六日が日曜日とあって正月休暇が延長されたのか、二日以降は例年にも増し



境内で配布したチラシ類

て多くの方にご参拝頂いたが、家族揃っての参拝が殊のほか印象的であった。また仕事始めに伴う会社や各種団体の参拝は、四日と七日以降とに分散されたのが特徴的であった。

大 勢の初詣参拝者を迎えた正月期間、大きな障害や事故もなく皆様方にご参詣頂けたのも、雑踏警備に、参拝車輛誘導にと御配慮、御尽力頂いた宗像警察署並びに宗像市消防団団長以下幹部役員と地元第十一分団役員の皆様方更には、年末・年始から十四日までの長期間御奉仕頂いた地元総代・協力会の皆様方を始め関係各位の方々の御支援、御協力の賜物と厚く感謝申し上げます。



宗像神社

大島・中津宮の正月

年の瀬にこの冬一番の寒波が到来し海上は大時化、フェリーも一便おきに欠航をするなど

帰島者への足にも影響がでたものの、大晦日には新年を中津宮で迎えようとする多くの参拝者が、寒風吹きさす中、中津宮

の神門前に列をなし開門を待った。

午前零時、境内に太鼓の音が響き、奉賛会員の奉仕により定刻に開門。島内氏子をはじめ、正月を故郷で過ごそうと帰島した人々が先を競い神前に進み、敬虔な祈りが捧げられた。



△大島の成人

神前には大島内外の漁業・農家より海の幸・野の幸が供えられ、社頭では正月の縁起物の破魔矢・福俵・熊手また一刀彫などが授与されるとともに、毎年恒例の「中津宮新春福みくじ」が沖・中両宮翼賛会会員の奉仕により授与された。



△賑わった中津宮での「福みくじ」

この「福みくじ」では(榊城山家具(宗像市・寺田修社長)及び宗像農業協同組合大島支所より特別協賛を賜り、授与所前は新年の福を授かるうと多くの参拝者が詰掛けた。

また境内では沖・中両宮奉賛会のご奉仕と巻網船団の宮地丸組、春日丸組、沖栄水産から鰯を、また沖西敏明氏からは野菜のご芳志を頂き「開運大鰯鍋」が本年も開催され多くの参拝者に振舞われた。

境内では午前七時、元旦祭が斎行され沖・中両宮奉賛会・翼賛会会員をはじめ島民が参列



△大鰯鍋も大好評でした

する中、本年の国家・皇室の安泰と島民・国民の幸福が神前に祈念された。

翌二日も天気は良いものの、気温は低く寒い一日となったが、午前十一時には成人祭が斎行され、十三名の新成人が参列された。

またこの日は三十三才、四十一才、四十四才と各々に厄除・晴厄の同年仲間祈願祭も斎行され、境内ではあちらこちらで、久しぶりの同年との再会に歓喜の声があがっていた。

三日には元始祭並びに宗像漁協大島支所の大漁祈願祭が

斎行され、沖・中両宮奉賛会並びに漁業従事者参列の元神前に本年の海上・操業安全・大漁満足が祈られた。
祭典終了後、社務所にて直会が行われ宗像漁業協同組合山口國一組合長による新年の挨拶にて始まり、一同本年の豊漁を願いながら盛り上がりを見せた。

かくして平成二十年の筑前大島の正月は沢山の島民のご協力により無事終える事ができた。

この正月祭斎行にあたり、各方面より多大なるご協力・ご協賛をいただきました崇敬者の皆様に、紙面をかりまして厚く御礼申し上げます。



△かがり火に集う参拝者

年越しの大祓神事・除夜祭

大晦日の午後三時より神門前で年越しの大祓神事が、続いて本殿で除夜祭が斎行され、この冬一番の寒波に見舞われ寒さ厳しい中、新年を

清々しい気持ちで迎えようという多くの参拜者で賑わった。大祓式は七月三十一日との十二月三十一日の年二回行



われているが、七月を災難消除、農作物の豊作を祈る「夏越の大祓式」、十二月を一年間の罪・穢を祓い、新しい年を清々しい気持ちで迎えようという「年越しの大祓式」と呼んでいる。定刻、新年を迎える準備が整った境内に参拜者が続々と詰め掛け、渡邊禰宜が大

祓詞を奏上、続いて参列者各人「切麻」で祓い、「祓物」に息を吹きかけて切り裂き、罪・穢を祓い清めていた。引き続き、本殿で除夜祭が執り行われ、当大社職員、参列者一同は今年一年載いた宗像大神のご加護に感謝し、皇室・国家の繁栄、世界恒久平和、氏子崇拝者の皆様方が清々しく新年を迎えられることを祈念し、平成十九年の諸祭儀は全て滞り無く終了、神門は閉じられた。



献米奉告祭斎行

境内はまだ、正月の参拜者で賑う晴天の一月十三日、宗像大社氏子会総代多数の方々御参列を頂き献米奉告祭が斎行された。

この神事は、氏子の皆様から寄せられた新穀を御神前に献上し、昨年の秋の収穫を感謝すると共に、今年の五穀豊穡、無病息災を祈る神事である。祭典では高野靖氏(福津市東福岡)が、氏子会を代表し『氏子奉幣使』として御奉仕された。前日から当大社に齋泊

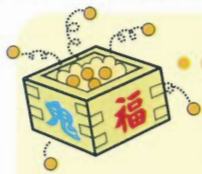
精進潔斎の上、斎服を着装して祭典に臨まれ、無事に氏子奉幣詞を宗像大神の御前で奏上、大役を見事に果された。祭典終了後には、氏子会役員を永年お勤めいただいた方(十年以上)の表彰式が行われ、本年は占部豊實氏(福津市東福岡)に感謝状と記念品が贈呈され、参列した氏子会同志から温かい祝福を受けた。

その後、清明殿を会場に『鏡開き』が行われ、直会として皆で雑煮・ぜんざいを頂き、新しい一年を清々しく過ごすことができる」と当大社を後にした。尚ご奉納いただいた献米は、日々の日供祭をはじめ諸祭典の神饌としてお供えし、皆様方の安全と繁栄を御祈念致しております事を御報告致し、衷心より御礼申し上げます。



氏子奉幣使を御奉仕いただいた高野靖氏(写真左)

平成二十年
献米奉告祭氏子奉幣使
高野 靖氏
(福津市東福岡)
宗像大社氏子会
永年勤続表彰者
占部豊實氏
(福津市東福岡)



お詫びと訂正 節分祭の御案内

先月号で「節分祭の案内」を掲載致しましたが、時間と会場が変更されましたので、訂正したものを御案内申し上げます。

日 時 2月3日(日)
節 分 祭 午前11:00～
 於=本殿
豆打ち式 午前11:30～
 // 午後14:00～
 於=本殿 特設舞台

本年より、祭典を祈願殿から本殿へ、豆打ち式も祈願殿前から本殿横の特設舞台へと変更しております。ご参拝の皆様には、変更が直前になり深くお詫び申し上げます。



「まつりごよみ」の原画 祈願殿ロビーに展示

年の瀬も押し迫った十二月二十九日、祈願殿ロビーに宗像大社のカレンダー「まつりごよみ」を彩った土井国男氏直筆の原画を展示、連日多くの参拝者にご覧いただいている。

十二月中旬、完成の報告に同氏が来社。その際に今年描いた原画を奉納したいとの申し出があり実現した。

早速祈願殿ロビーに展示用のつい立を準備し展示したところ、正月参拝の休憩に入つて来られた方、お車のお祓いを待っている参拝者らが、食い入るように見入っていた。さらに、この原画をご覧になって「まつりごよみ」を受け取る方もみられ、土井氏のほのぼのとした優しい水彩画がもつ魅力が再認識させられた。

ご参拝の折には、祈願殿内にもお立ち寄りいただき、是非ご覧下さい。



(続)

浜の寄物

222

いいいただし



第七回漂着物学会は種子島・西之表市の種子島開発総合センター(鉄砲館)で十月二七日に行い、翌二八日のビーチコーミングは南種子町の竹崎海岸(種子島宇宙センター)と、広田海岸を歩いた。

広田海岸の砂丘には著名な広

田遺跡(埋葬墓地)がある。この海岸は南種子町教育委員会の石堂和博氏に案内をしていた。広田遺跡は南側に墓地群があり、一九五七年から発掘調査されたが、墓地は更に北側の広田川に延びている事が近年の調査で確認された。遺跡は全



▲広田遺跡入口

長一〇〇メートル、標高九メートルの砂丘地で、背後の西側は湿地帯となっている。現在遺跡地の一帯はコンクリート壁(砂に埋もれているのが高さ一メートル)斜面は土囊が積まれて浸食を防ぐ保存処置がされていた。

七体の人骨が発掘されている。全員が過短頭(人間の頭部を上から見た形。前後に長いもの長頭、幅広いものを短頭)で、頭部に人工的変形も見られる。墓は大きく下層と上層に分けられ、下層が弥生時代後期後半の頃から古墳時代前半、上層が古墳時代後期頃である。また下層と上層では墓の構造が異なり、副葬品の貝製品にも微妙な違いがある。

下層の人骨は膝を折りまげた屈葬で、方形に珊瑚塊や石等が配されている。女性の遺骸は珊瑚塊で囲んで丁寧に埋葬されている。そして貝符や貝製小玉や竜佩(貝を細長く勾玉状に加工し端部に突起がある)貝製垂飾り、ゴホウラやオオツタノハガイは奄美、沖縄産の貝輪を着装している。貝符や竜佩には孔が穿たれているところから、繋ぎ合わせる、衣服に縫い付けたものか、埋葬の際に繋いだ糸を切ったバラバラにして遺骸全体に撒布されたかのように出土する。男性人骨はほとんど装身具の副葬がない。ただ一体だけ貝符や竜佩、貝製小玉を多数副葬したものがあつた。この男性は骨が細く額の上には、生まれて間もなく、小円形の飾りを固定して締めたと思われる痕跡がみられた。生まれながら祭祀を司る「巫女」と同じ役割を担った男性呪者であつたのだろうか。幼児の骨のなかにはヤコウガイ製の貝器が副葬されたり、甕の中に入れて埋葬されたものもあつた。上層は頭骨や四肢骨などを集め石棺内に囲んだ中に埋葬され、その下に焼けた貝輪や貝小玉など一緒に焼けた焼骨層があつた。副葬品の貝符には孔がないので、貝製品の使用方法が異なつたことが考えられる。広田人の副葬した貝符の文様は中国古代に源流がある鬘鬘文や虺龍文文様があり、中国東南地域の交流も想定されるし、抜歯の風習もあり、上顎片側の側切歯を抜歯しているのは、台湾や中国南部に見られる例がある。なにやら中国の影響が推測される広田人である。

その姿が分かりつつあるが、まだまだ多くの謎に満ちている。ここはあくまで広田人の墓地であり、今後は生活遺跡の発見である。これだけの墓地であるから、恐らく墓地から離れていないところに住居地、多量の貝製品を造つた工房、巫女達がカミに祈つた祭祀場があると思われ。石堂さんの説明を聞き、風と波の音は、広田人の声のように思われた。

▶種子島に漂着した仏像



▲中央オオツタノハガイと貝輪

第五五八回 宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日メ切



北九州市 八幡西区 吉田ウト子

つくばひの石肌愛しもきらきらと水陽炎の揺るる小春日

評
つくばひの石肌を愛すところは孤独のころにも通じていて、明るい景のなかにも寂しさがただよふ一首。二句の「愛しも」の「も」の強調は無くともいい。

宗像市 東旭ヶ丘 天野 玲子

いただきし千柿いまだ柔かく今日の夕日の色に似通う

評
まだ干し上つていない千柿の色を「今日の夕日」と、とらえた感覚は素晴らしい。「柿干してけふの独り居雲もなし」秋桜子の心境にも通じている。

宗像市 光岡 森田富佐子

重き荷をかつき疲れし夢を見た起きいでがたく布団にもぐる

評
夢と気づきながらそこから逃れようとして逃れなれどもどかしさ、その気持をうまく詠っている。「不快なる夢を覚めんと努力して漸くさめし時疲れをり」と、かの佐藤佐太郎も詠っている。

宗像市 日の里 大和美由紀

満月の残るあかとき笹鳴きの弾みし声の畑より聞こゆ

評
冬に鶯の鳴き声はまだ調わず舌つづみを打つように鳴き、声としては小さく「弾みし」は疑問がのこる。弾みを生かすなら三句以下「笹鳴きを弾み」ころに「吾はききをり」としたらどうだろうか、また「弾み」を除き「小さき声の」とする事も考えられる。しかし一首全般には淡い詩情がある。

福津市 若木台 野間 精一
 青草を褥しよとなして降り積みし銀杏黄葉は輝くばかり

福津市 中央 中村 勇
 獨り居は朝より淋し夕くれば仏壇の妻に鐘強く打つ

福津市 中央 池浦千鶴子
 黄櫨並木の紅葉あでやか喧騒の中にはぜの実しずかにゆれて

宗像市 田久 卷 桔梗
 本殿へ指組む少女願ひごと成就の差異はたぶんなからむ

福津市 星ヶ丘 佐々木和彦
 断崖の滝と吊橋は指呼の間されど落水の音は聞こえず

福岡市 南区 加野シノブ
 大宇宙あをく輝く星地球人間の手でほろぼしていく

宗像市 田野 森 甲子
 防衛省のずさんなニュース続くなか日本野球の五輪出場決まる

うきは市 浮羽町 向 則正
 ふる里のうからの眠る墓地に来て母と草ひく遠き日のたつ

北九州市 戸畑区 田中ハツセ
 軒高く朝日に映えるブーゲンビリア師走の風に耐えて咲きつぐ

宗像市 光岡 則松 芳子
 冷え込みの季節風吹く時期となり日も短くて年の瀬近し

宗像市 光岡 白土 凌一
 我と来て紅葉共にあそびしか吾も楽しき良き友と

選者詠

飲もうやと誘ひ誘はれし友も逝き本も億却身を知る雨降る
※身を知る雨(伊勢物語、わが身の幸、不幸を知る雨)

散髪にあわひに爪を切りくるる職業胼胝たこのまだ無き指で

刈り終へて合せ鏡で見す頭ノンと言ったらどうするのだから

第五三三回 俳句作品集

宗像市 光岡 白土 凌一
 大空に舞いし鶯のゆうぎなり

宗像市 日の里 花田いつ枝
 冬耕や止どめのスコップは深くする

宗像市 東郷 田中 憲象
 初御空森に迷めく神籠石

編集後記

正月参拜も落ち着いてきました。天候や曜日の影響で今年の初詣は分散傾向にあったようです▼昨年からは、先人の書き記した日誌(墨書で製本し永久保存)を紐解く機会が増え、宗像大社の先輩神職(ほとんどの方が故人の思いに触れるよい機会となつています)▼その中でも昭和三十年代のものは、モーターリゼーションの波に乗り、宗像大社が交通安全の神社として躍進していく時代で特に興味深いです▼当時の正月日誌には、夜明けまで続く大渋滞を「一年に一度の宗像不夜城を現出」と記し、毎年三割増の車祓や天候が悪くても増え続ける参拝者の様子を「御神徳の明らかたるを目のあたりにせり」、「誠に御神徳の然らしむるところか」と書き記しています▼『温故知新』で始めた日誌の閲覧ですが、その内容には共感や時には感動を覚え、励まされています。「御神徳の宣揚」その実践のために「神職として何が出来るのか」、「先人達の足跡めぐり」は今年もまだまだ続きそうです。(M.O)

宗像大社社務所
 発行所 宗像大社

〒811-3505 福岡県宗像市田島
 電話 0940-62-1311(代)
 発行人 葦津幹之
 編集人 大塚宗延
 制作 セネラルアサヒ
 印刷 セネラルアサヒ

定価1年送料共1,000円